

特集

GIGAスクール構想

「GIGAスクール構想」
とは？

令和元年十二月に閣議決定された「安心と成長の未来を拓く総合経済対策」の中で、学校における高速大容量のネットワーク環境（校内LAN）の整備を推進するとともに、特に義務教育段階において、令和五年度までにすべての児童生徒がそれぞれ端末を持ち、十分に活用できる環境の実現を目指すことが示されました。いわゆる「GIGAスクール構想」です。Society 5.0時代を生きる子どもたちにとって、PC端末は「マストアイテム」であり、近い将来、社会のあらゆる場所でICT機器が日常的に活用されることとなります。

そして、その波は、学校教育にも例外なく訪れ、これまでとその状況が大きく変わると言われています。また、萩生田文部科学大臣は、「一人一台端末環境は、もはや令和

の時代における学校のスタンダードである」「これまでの我が国の百五十年に及ぶ教育実践の蓄積の上に、最先端のICT教育を取り入れ、これまでの実践とICTのベストミックスを図っていく」と発信しています。このような、教育界の大きな変革期とも言える今年度は、そのスタートの一年となります。

「まずは慣れる」ことから

「教育環境が大きく変わる」とは言っても、一度に全てを変えることは、現実的ではありません。これまでの教育と同様に、「二歩一歩、確実に」前進する必要があります。盛岡市では、今年度はGIGAスクール構想初年度として、ICT機器の活用に『慣れる』一年と考えています。教師も、児童生徒も、まずは端末を使ってみる。その中で、どんな授業（学習）の、どの場面で見れば、学習効果がより

期待できるか。工夫しながら取り組んでいくことが大切です。「教師は教える、児童生徒は教わる」という関係だけではなく、ICT活用に関しては（子どもたちの発達段階にもよりますが）教師と児童生徒の双方向の学習場面も考えられます。そのような場面が授業で展開されることも、これから増えてくるかもしれません。

ただし、忘れてはならないことは、ICT活用はあくまで「手段」であり「目的」ではないということです。これまでの教育を、より豊かに、より効果的にするためのICT活用であることが大前提です。「学校におけるICTを活用した学習場面」（下図）などを参考にしながら、これまで実践してきた様々な学習場面を振り返り、「学習効果がより期待できる」ICT機器の活用について、アイデアを出し合うなど、まずは「できるところから」始めましょう。

学校におけるICTを活用した学習場面

A 一斉学習	B 個別学習		C 協働学習	
<p>挿絵や写真等を拡大・縮小、画面への書き込み等を活用して分かりやすく説明することにより、子供たちの興味・関心を高めることが可能となる。</p>	<p>デジタル教材などの活用により、自らの疑問について深く調べることや、自分に合った進度で学習することが容易となる。また、一人一人の学習履歴を把握することにより、個々の理解や関心の程度に応じた学びを構築することが可能となる。</p>		<p>タブレットPCや電子黒板等を活用し、教室内の授業や他地域・海外の学校との交流学習において子供同士による意見交換、発表などお互いを高めあう学びを通じて、思考力、判断力、表現力などを育成することが可能となる。</p>	
<p>A1 教員による教材の提示</p>  <p>画像の拡大提示や書き込み、音声、動画などの活用</p>	<p>B1 個に応じる学習</p>  <p>一人一人の習熟の程度等に応じた学習</p>	<p>B2 調査活動</p>  <p>インターネットを用いた情報収集、写真や動画等による記録</p>	<p>C1 発表や話し合い</p>  <p>グループや学級全体での発表・話し合い</p>	<p>C2 協働での意見整理</p>  <p>複数の意見・考えを議論して整理</p>
<p>B3 思考を深める学習</p>  <p>シミュレーションなどのデジタル教材を用いた思考を深める学習</p>	<p>B4 表現・制作</p>  <p>マルチメディアを用いた資料、作品の制作</p>	<p>B5 家庭学習</p>  <p>情報端末の持ち帰りによる家庭学習</p>	<p>C3 協働制作</p>  <p>グループでの分担、協働による作品の制作</p>	<p>C4 学校の壁を越えた学習</p>  <p>遠隔地や海外の学校等との交流授業</p>

※「学びのイノベーション事業」実践研究報告書（平成26年度）より

NITS 独立行政法人教職員支援機構

いわて学びの改革研究事業

岩手県教育委員会では、ICT機器を活用した「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業実践および実証研究を目的として、岩手大学・岩手県立大学との共同研究「いわて学びの改革研究事業」を推進しています。その研究協力校として、県内の小・中・高等学校七校が昨年度授業実践に取り組みました。

盛岡市では、飯岡小学校、飯岡中学校の両校が、この事業の研究指定校として、県から貸与されたタブレット端末を活用した授業づくりに取り組んでいます。

両校においては、ICT機器を活用することによって、より学習効果が期待できる方法について研究し、実践に取り組みできました。そして、本年2月には、それぞれ取り組んだ研究の成果を、オンライン形式にて発表しました。飯岡小学校からは、算数科の取り組みを中心に、ICT活用の実践が様々紹介されました。

いわて学びの改革研究事業
令和2年度 第2回研究推進委員会（兼）第4回研修会

盛岡市立飯岡小学校
令和2年度 研究成果について



令和3年2月15日（月）
盛岡市立飯岡小学校
教諭 宮野 恵子
教諭 福士 晴彦

令和2年度
いわて学びの改革研究事業
第2回研究推進委員会【全体会】 兼 第4回研修会

盛岡市立飯岡中学校
【研究成果報告】



令和3年2月15日（月）
盛岡市立飯岡中学校
研究主任 朴 館 伸 顕
数学科 菅 野 亜 紀

児童が自分の考えを、ロイロノートの思考ツールでまとめ、教師が大型提示装置を活用して、児童が互いの考えを共有したり、マット運動の演技を動画で撮影し、自己分析することを通して、修正箇所を把握したりする等、ICT機器を活用した多くの事例がプレゼンテーションされました。

また、飯岡中学校からは、数学科を中心に、国語科や英語科の取り組みも紹介されました。

国語科の学習において、「平家物語」を音読したものを録音し、自分で聞くことにより、客観的に自己評価を行いました。この録音は、教師が後日表現活動の評価をする際にも役立ちました。

また、英語科では、プレゼンテーションを動画撮影し、グループで共有することにより、お互いの表現力を高め合うことになりました。



〔dynabook〕

〔Lenovo〕

今年度から使用する端末機器
右が児童生徒用、左が教師用

それぞれの発表では、「子どもたちの思考や考え、発表などを、ICT機器を活用することによって共有し、学習を深めることができる」といった効果と併せて、さらに活用の場面や方法について深めていく必要があること、ICT機器活用時のルール作りの必要性等今後の課題についても述べられています。

さらに、ICT機器の活用が目的とならないよう、授業のねらいを達成するための手段として、効果的に活用することが大切であることがあげられています。

これから、市内全ての学校において、ICT機器を活用した授業が可能となります。ぜひ、様々な場面で、活用してみましよう。まずは使ってみること。そして、少しずつ活用方法を修正したり、広げたりして、それらを職員間で共有しましょう。

盛岡市教育研究所では、夏の公開講座、「所報こずかた」で、様々な情報を発信していく予定です。

すべては、子どもたちの学びの充実、そして何より、子どもたちの笑顔のために。

文部科学省ではStuDX Style ページを開設し、GIGAスクールのような情報を提供しています。



https://www.mext.go.jp/studxstyle/